

島田清次郎未定稿翻刻 III

The Reprinting of Unfinished
Manuscripts by Seijiro Shimada III

小 林 輝 冶

前回は引きつづき、清次郎の残した「保養院」時代の草稿から、さらに二編を選び翻刻、そこに出てくる問題を考えてみたい。

いずれも、少し手を加えれば、十分佳作たりうる短編である。しかも、無造作にノートに書かれたものでありながら、漢字・外来語、並びに政経中心に出てくる人物・事件・年代等、その殆んどが、まちがいに書き出されている。

執筆年代も、そのノートの紙質・筆蹟等から推して、先に紹介した「縁」(この稿の終わりには「一九二五年五月十日」の日付けが記入されている。)同様、巢鴨の「保養院」に收容されてからのち、少くとも大正十四年以降のもの、と判断されよう。

したがってまた、この時点における清次郎を全くの狂人と見做す従来の見解には、到底承服しがたい。

最初の「白刃」の一編は、白虎隊の自刃に因んでの題だが、話と

しては、主人公社会運動家野島の淡いラブ・ロマンスと見られるものである。しかし冒頭、新潟へ講演に行くくだりに始まり、宿へ着くや、いきなり「基督抹殺論」を著わした幸徳秋水の噂が飛び出す。それが同じように基督を書いたルナンを問題にする辺りは、それとなく、野島なる主人公のネーミングも、荒野に神の声を聞いたイエス・キリスト(「島」はもちろん「島田」の一字)に依ったことを教えたものかも知れない。そうだとすれば、後半の「一つ僕の釈迦を書いてやらう」ということばにもそれは確かな対応を見せている。

以下、暗殺された安田善次郎の話から、ことばだけとはいえずワシントン会議、さらにはイギリスの社会学者D・H・コールから贈られた一冊の書物についてまでが書きこまれている。そこに窺えるものは、やはりどうにも押えがたい、彼自身の烈々たる政治への野心であったといえよう。

ただ、いかに下書きであるとはいえ、やたらに英語や外来語を多用することについては、彼の語学自慢が鼻につき、厭味以外の何物でもない。また、途中から現われる青年綿屋（後半で「綿合」とも書かれたりするのは、勿論これがあくまで下書きである。）、ヒロインに当る唄姫楓、そういった人物についても、内面は少しも語られることがなく、いささか安直でありすぎる。

また「変な弁護士」という題は、清次郎の外遊体験（大11・4）をふまえ、帰朝後の野島を、講演に呼んでおきながら顔を見せない友人の東田（彼は弁護士資格をもつて、東北の「震災の」に對していただいた彼の奇異の念を即題としたものである。あとに、「舟木芳江事件」についてかなり書かれているところからみて、この東田という人物は、恐らくは、島清がその名を詐った知人の「弁護士矢代亀広」をモデルとしたものである。そう考えれば、事件によって多大の被害を受けた東田が、半年後の講演会場に姿を現わさなかった理由もきわめてはつきりする。）

それにしても野島、一連の小説から推してフル・ネームは野島民造だと思われるが、その「民造」にこめられた「民衆の心、精神を改造したい」とする念は、この小説にあってはいっそう顕著である。たとえば、彼の外遊に際して、なぜ一年で帰国するかについて、こう書いている。自分が「残してゆく日本の新しい時代を、彼れの精神の下に、彼れの暫らくの留守を守るに足る適当な後継者がなかったのである。『これといふ後継者がなければ、仕方がない。自分は三年の予定のものは一年に短縮してでも、太平洋の彼方から、この島国日本を支持し見守ることができる。』これは、当時故郷金

沢の同人誌「凶鳥」に寄せた詩の各行ともびたり符合することばである。「僕は君達の末広がりゆく未来を祝福する。／僕のあらゆる冒険、苦闘、事功は、要するに僕以後に来ると若き者達への道開きにある。／モーゼの如く、僕は全民衆の先頭に立って」「足のきく限り、／いな、足がきかなくなれば胴で歩いてでも、僕は君達を新しい世界へ案内してゆく、／それが僕の役目だから」そしてこう結ぶ。「勉強を怠るな。／僕が世界認識の旅から帰る日迄に、／少しはしっかりしてゐてくれ。」

しかも、彼が社会改造の第一歩として、一日も早く日本における普選法の成立を熱烈に願っていたことも、次のことばによって明らかである。「彼れの帰朝の時期は、」「社会的にも、また政治的機制の上から見ても、彼れが主として滞在する英吉利よりは一世紀はおくれてゐると思はれる我国にも、少くとも普通選挙法が実施せられる時期であらねばならなかった。」

ここには、あの「地上」第一部の少年大河平一郎の格段の成長があると考えられなくもない。惜しむらくは、この完稿を残さず彼れ他界してしまったことであろう。

なお、白樺派の活動に触れ、武者小路実篤を「むしろずるい」人物だと批評し、その演説に対しても、晁鳥敏と比較して「少し都會人らしく新しく」また「もう少し強」いが、しかし「浅い」と断じている。この鋭い観察にも、やはり清次郎の生活観・人間観が覗いているようで興味深い。

興味深いといへば、今一つ舟木芳江に触れた部分についてであろう。一般論としては、東田の言として「女てやつは」（とにかく、つづる）

い Creature には相異なる」などと書きながら、こと彼女に関して
は、ひとことの非難めいたことばも見つからない。当の忌わしい事
件についても、まるで甘美な何かに接するような態度である。「彼
れが、その日、西洋室で見せた花束の捧げ主である純潔なある華族
の令嬢と、湘南の海辺へ、『新婚の旅』に出かけた時、彼れはあや
まって、東田の名を宿帳につけた。それが、あの一時天下を聳動さ
せた『彼れの恋愛事件』へのつけ火となったのである。」ここでは、
短い一種崇高なマドンナの如き存在として芳江は書かれている。
新たな驚きである。

終わりに、翻刻の際、とくに留意した諸点について述べておく。

① 漢字・かなづかい（ただし「ルビ」については除く）等の
明らかな誤りについては、その横に「ママ」を付ける。ただし、
あとで漢字を入れようとして（半ば書きかけたものも含め）、先に
ルビを付したものなどについては を、さらにノートに破損が
あったり汚れがあったりなど、きわめて判読のむずかしいものにつ
いては、その字相当分を「X」で示すことにした。

② 明らかに文字等の脱落と見られるものについては「」をもっ
て補い、逆に、補正等において消し忘れたと思われるものについ
ては、その部分を△▽で囲むことにした。

③ また、漢字のうち現在施行されている「常用漢字表」にある
ものについては、すべてその字体によって統一した。

白（山）刃（山）小 説

島 田 清 次 郎。

一、

最初彼れは、その社会問題講演の招請をことはらうかと考へた。
「先生のお邸がどこか分らないものですから、お訪ねするの到大
へん骨折りました。」と、新瀉新聞の、名しをもって訪ねてきた男
の話では、F博士のところへ行って断はられ、K・K氏のところへ
行って、やうやく彼のアドレスを知ってたのみに来たのらしかった。
彼れはF博士のやうに大学の授業に追はれることもなければ、K・
K君のやうに毎日の新聞や月々の雑誌の寄稿に追ひ立てられるとい
ふことはなかったが、彼れは彼れで、一年來の論究のXXXに、都会
の騒音を、その頃、森ヶ崎に避けてゐた。

ある夜、その宿へXXX海岸芸妓らしい四五人づれの騒々しい客が
たづねてきて、しきりに卑猥な歌などうたつて、大きわざをはじめ
たので、彼れはすっかりまるってしまった。「僕なら一二ヶ月もゆ
っくりとどまる予定でいっていいな。」と、言ったK・K君のや
うに、それほど深い好意を地方の都市に抱いてはゐなかつたが、砂
風呂芸者の騒々しさに悩まされてゐるよりは、信濃川の河口の未だ
見ぬ古るい開港場を見てもいいと思はれたのである。

やはり、新瀉へ講演にゆくのだといふ神宮奉^マ齊長の某氏と同車し
た。彼れは、次の日の朝、市街とははなれた停車場についた。出迎
へらしい二三の知識階級らしい人々が見えたが、少くともK・K氏
等と同行してゐる洋服姿の彼れを予想したらしい彼等は、彼れに気
づかずに、後方のボギー車²⁾をさがしてゐた。

彼はひとり、古ぼけた水流の少くない、兩岸の堤と同じ高さ
に堆積した芦や薄の生ひ茂った砂州ばかりの信濃川の大橋を、わた
った。でこぼこの腐れた橋桁に俥の輪がひっかゝるらしかった。彼
れは枝垂れ柳の生えた濠端際の一軒の新築の宿屋へついた。そして、
彼れを請招してゐる〇〇学会の幹事へ今着いた旨を電話で知らせた。
間もなく、その〇〇学会の幹事は彼れを訪ねてきた。

彼はK・Kのために同行できなかった理由を弁明せねばならな
かった。

お定まりの写真をとって、彼れは幹事の作中のレザークラフトをしてい
た、もう一軒の古い旅館へかわった。

東京ではあまり問題にはならない野蘇の生涯とその時代をとりあ
つたある中年の著者の噂を作中(4)はした。作中は、越後平原の農
村問題や小作人問題で、筆禍事件に□せられてゐるらしかった。

「野蘇の一生を人間として取り扱った著者は、仏蘭西のルナンが最
初だ。」

「聴衆が多数物産陳列館の階上集って御待ちうけしてゐます。」
と同じ主催者の弁護士が知らして来た。

彼れは作中につれられて、外へ出た。

二、

彼れは、うらぶれた秋風の吹く市街をみて、何んだかひとりで講
演をする勇氣と自信がなくなったやうに思った。

新潟医専のテニスコートを越えた松林の向方の砂浜には、荒々し

い烈風が吹いてゐた。日本海の角度の荒らい波浪は白い牙をむいて
波打ち際へうちつけてゐた。それは、彼れの神経に未だ感じたこと
のない険しさと寂しさを与へた。

「あれが佐渡が島です。」危っかしさうに作中が指さした。

佐渡は黒藍色の荒波の彼方にかすかな影としか映じてゐなかつた。
砂浜を踏んで、時間のたつのを待ってゐるうちに、彼れに、講演
の自信ができてきた。

彼れは、女学生などもまじつた六七百名の聴衆に、彼れの考へを、
二時間余の間しゃべった。

暗殺された安田翁の心事にも同情するといひ、ワシントン会議の
国難に非ずして、世界大戦直後のヴェルサイユ会議の訂正であ
り、反省であることを説いた時には、共鳴する人もあるらしかった。
彼れが、熱した頬のはてりを感じて、帰途についた時、青ずんだ濠
の多い、会場前の広場を、紫綾織の紋付羽織をきてえび茶の折り目
正しい袴をはいた少女達がつれそってかへりかけるのに出あつて、
「自分の聴衆」が必しも浮薄に、不真面目に受けとられてゐないの
を喜ばずにゐられなかつた。司会者の弁護士がK・Kが顔を見せな
いといふ理由で会費を払ひもどすと言つたのも、彼れ自身丈の解
釈では、うなづかれぬこともなかつた。

川べりの柳の下で、「野島先生」とよびかける一人の青年があつ
た。

瘠せこけた身体に、質素な洗ひざらしの□の袷を着て木綿の袴
をはいた、一人の青年であつた。

「綿屋君でないか。」「え、さうです。」

東京にゐる時分、一二度原稿をもって訪ねてきた、やゝ^{ひまわりつ}逸な青年であった。

「お供をしてもいゝでせうか。」「うむ。」

宿へかへると、主催者側の紳士諸君が詰めよせてゐた。

みな、彼れが洋服をきてくるものと思つてゐたといふ話だった。彼れはその春新調したモーニングをきてくればよかつたと、わらつた。渋茶をすゝつて一同が去つたあとで、綿屋はゐ残つた。

「先生、さっきの弁護士はあなたに講演料をおいてゆきましたか。」

「いや、未だ何んの話しもない。」

「それは、いけません。貰ふ可きものは、はつきりきまりをつけていらつしやうなくてはいけません。」

女中が、彼れの愛用の貞宗の白^{まろ}の短刀を、衣装棚の縁へ掛け直してゆく音がかちりとした。

彼れは主催者の弁護士を呼びよせて、その^{まろ}ぐるみの白^{まろ}の短刀で畳をたゝいて、⁽⁹⁾彼等の無礼とざるさを怒つた。

その夜、東京のより暗らい大通りを散歩して、来客用の桐火鉢に見とれる彼れをみて、綿屋は、「さっき短刀をたゝいて怒つたあなたと、今のあなたと、二人の先生のゐられることを知つた。」と言つた。

綿屋は、同じ市街に小学校の教師をしてゐるらしかつた。

三、

「君と一緒に東山まで来て見送るなら来ていゝ。宿屋の御馳走は僕がしてもいゝ。汽車賃は、君が見送るといふんだから、君の a count だよ。」さういふわけで、綿谷は、彼れが帰京の途中一夜寄つてゆくといふ東山温泉へまで同行することになった。「本とうなら、あの会場で、先生を中心に聴衆全部で写真をとるのが正當なんだ。」とひどくふん慨した綿谷は、彼れを市街の写真屋へつれていって幾枚となく写真をとらせた。「わたくしの俸も東大の法科へいってをります。」と写真屋の主人は彼れのために何辺となく××をかへた。「全くひどい、あんな写真つてあるものぢやない。」と、写真屋は新聞の写真版を攻撃した。

会津若松。黄ばんだ^{はせ}榎や紅葉に色づきつた^{かえで}楓の美しい河、明るい溪谷、水量のゆたかな藍色の上流、白い砂地。スキス、ローシヌ河の上流に似た沿道の景色は飽きることがなかつた。

彼れは綿屋に、明治維新の際、最も頑強に、薩長の連合軍に対して、最後まで抵抗したのが、会津藩であったことを話した。その会津藩を討伐に向つたのが、今の文治派の青年公卿の西園寺公であったことなども話した。「考へてみると、昔しの人は豪かつたものだ。あの勝海舟翁は、井伊掃(部)頭が桜田門御門で暗殺された年は、幕府の海軍奉行として、桑港へわたつてゐられたさうだから。」

「東山へゆく道に、白虎隊の墓があります。」
青年がこたへた。

「僕の知つてゐるある処にゐた青年は、会津若松の旧藩士の息子だったが、この間、白刃で腹十文字にたち切つて往生をとげたと思つて知らしてきた。」

「あなたの著書の影響ではないでせうか。」「冗談ぢやない。」彼はこたへた。「どこか明治の西欧文明におくれたところがあるのだよ。」歩いてゆこうと、考へてもみたが、あたりが何となく□びて、寂寞としてゐるので、(停車場までが軒が低く、都会らしくなかった。)彼れと綿屋は二哩ほどの道程を俾で出かけた。収獲のすんだ寂びれた平野、淡く白雪をいたゞいた盤桁山の姿が、虫ぼんだ枯れ葉をつけた柿の枝などの路上へさし出た。田舎風の家が、東北の溪谷と河流と、山林の美しい東北の温泉へ近づいたことを思はせた。青い霽れた秋空だった。

やがて見覚えのある形式の古い桜岡作りの向へついた。

四、

彼れは東山は最初ではなかった。未だ湘南の別荘にこもつて外遊準備の社会問題の研究に没頭してゐた当時だった。

倫敦にゐる友達から、'The world of labour'の一冊を(ギルド・ソーシャリズムの提唱者で若き社会哲学者のデ・エチ・コールの主要著書)といふ親書つきで贈られて、ぜひ読まねばならぬのだが、Hopeにさまたげられてよまづにゐたのである。彼れはその書を抱いて、冬の日、雪の降りしきる、この東山温泉へ来たことがあった。青藍色の清い溪流へ、渦巻く深淵の面へ、山峡の白雪が吹雪いてゐた。彼れはひとり、その木構子の間からその凄さまじい雪景色を眺めながら、こんこんとして尽きぬ地湧の透明な熱い泉

に浸つてゐた。深碧の溪流、透明の泉、白雪。——彼れは大地の生命そのものに自分をひたしこんで、無限の生命の脈絡を成してゐる

浴室の戸をあける音が遠くでひびいた。彼れを眼をつむつてゐた。かすかに衣ものをぬぐ音が可なりに近くでした。眼をあげると未だ十五六のすんなりと背丈の伸びきったわりに、未熟な果物のやうに肉付のうすい、ひとりの少女が豊かな丈け長な緑の黒髪を背に垂れたまゝはいつてきた。そして、彼れには構はずに、深淵のやうに青みを帯びた同じ浴槽のむこうがわへ、はいるのだった。

それは何といふすばらしい美しさだったらう。彼れはしばらく、みつめてゐたが、ひたひたと湧いては流れる温泉を透して、化粧の香の移るのに、彼女が少くとも歌妓の類であることを知らねばならなかった。彼女は、彼れの悪意をもつてゐないのを確かめると、にかつと微笑んで、湯槽のなかを遊びはじめた。すんなりと伸びのびした背丈ではあるが、東北人らしい大がらながっしりした骨格と淋しい品格と気稟のある顔容が、彼れの心に深く刻みつけられた。

彼れは湯からあがって、その主人と話の次手にその少女に就いてたづねてみた。彼れは、その主人から、彼女が芸名を楓といつて、未だ出たての唄姫であつて、会津藩士の娘であることを知つた。彼女は、凍みつくやうな冬の夜、読書のかたはら、ほつと息づく彼れに、わづかに洪茶の一杯をつぐに止つてゐた。

彼れは、そのいとけない歌姫のことを短歌につくつて、友達に笑はれたことを思ひ出したのである。

「君、それは向方だつて悪意はもってゐないのだよ。へんな田舎の商人なんかには節操を摘ますより、少し思ひ切つて君が、抱きしめてやる可きだったのだよ。」

五、

もとより講演料といふものを「強いて」まで貰ふべきものといふことを知らなかった彼れは、貰つた丈けのものは、このいゝ秋の行楽に費つてもいゝと考へてゐた。

その夜は、彼れは綿屋の肝入りで、この東山の美しい女を三四人見ることができた。

その中には、赤坂あたりから療養がてらにきてゐる女もゐたが、その三四人の中に、ひかえ目ではあつたが、成長した彼女を見出すことは、どんなにうれしかったらう。

彼女は、つゞまじやかに、素知らぬ振りのうちに、「お久しぶり」だつた瞳の微笑をもつてみなと一緒に彼れにお辞儀した。

それはわづか一年の間のことではなかつた。しかも、彼れは、もはや、あの楚々とした未熟な彼女ではなくして、骨格のできた、挙措に一種の色艶の生じた、大人びた、艶やかな大きな銀杏に結つた彼女を見ねばならなかつた。

「君は赤坂にゐたの。」綿谷は疑ふやうにまじまじとその年上の人を見つめて、言った。

「それぢや、ここにゐられる方を誰れだか知つてゐるかい。」

「知つてゐるわ。」さう言つて、彼女は楓を見上げたが、彼女は面

を伏せてしまった。

彼女はやがて、哀□で、男性的で、悲壮な、白虎隊、の大津絵を歌つた。

彼れは幕末史を背景に、すでに一人の女になつてしまつてゐる彼女と十六人の少年の悲壮な死と、時代の進運にはどうすることも出来なかつた会津藩士の悲哀を思ひあはせて、涙ぐまずにゐられなかつた。

明日は紅葉狩りにゆく約束をして、彼女達が去つてから、彼れはひっそりした宴りのあとの寂しい静かさに、火鉢をかこんで綿谷と白刃をもつて腹十文字に断ちきつて死んだ青年について話した。

「釈迦伝の資料をあつかつてゐるのだ。」彼れは、白虎隊、の哀□な悲壮な彼女の調べを想ひうかべて、涙ぐみながら、哀はれな青年の志を思ひやつた。

「一つ僕の釈迦を書いてやらう。」

さういつて、彼れは、彼れの白刃と原稿類を入れた黒皮の折鞆をひらいて拙ない文字の遺稿をみせるのだった。

彼れは、いたく大人びながら、痛ましいほど羞づかしかつた彼女を想ひうかべ乍ら、どこかに、哀れな青年と肖たところのあるのが、異様な感觸で迫つてきた。

六、

翌日は霽れた晩秋の朝がめぐまれてゐた。

楓は、あらい大島の普段着に、緋染の裏地に黒地金紗お召の羽織

をつけて、きた。それは濃艶で、美しかったが、楚々とした風格は失はれてゐなかつた。本当に文字通りの「一瓢」に芳酒をつめて、彼れは、普段着を着ながらたまゝ溪流に沿ふた細道を山間の紅葉の林へのぼっていった。

落葉の散りしいた道はやゝ陰はしく、道に沿ふた流れは、急湍と激して白い水沫をとばしてゐた。

山間のひえびえとした森蔽の気が彼れの心を洗ひ清める。

「先生。」さういって、楓はどうぞ堪えきれなくなつて彼れの手にすがりついた。

うしろから袴をつけた綿谷はひさごを下げて黙々とついできた。

そこは、櫟や榎の樹林の日のかげつた、冷めたいほど秋の冷気のこたへるわづかな盆地だった。

小 林 輝 冷
楓は白い瀑布の垂れた紅葉の色づいた深淵に面した落葉の上を袖で払つて、この朝の Picnic の座席をとゝのへた。折りづめのなかには彼れが云ひつけてをいた通り焼き松茸が調味せられずに並べてあつた。

彼れは、自身の少年時代を思ひ浮べながら、松茸をこまかく裂いて、用意してくれた生醬油につけて、あらためて、朝のすばらしい冷気の中に、紅葉林の間の宴をひらいた。

楓はこの素朴な、加賀の松茸料理の味を、高雅なものとして味はつた。そして、彼れの膝に顔を伏せて、すゝり泣く真似をしたりした。ふと、その黒髪の生え際から、彼れはふたゝび不思議な情欲に似た口惜しさが湧いてきた。

「綿屋君、どうして、会津藩出の末口にはこうも寂しい人が多い

のだらう。」

彼れは、綿屋をかへりみた。綿屋は答へなかつた。

「あなたが、初気で、愚図だったからなのよ。あなたが、初気で愚図だったからなのよ。」

どうぞ堪えきれなくなつたやうに、楓が立上つて叫んだ。

そして、袖で顔を蔽ふやうにして、市の方へ駆け出すのだった。

彼れはあとを追はずに、たゞ楓の紅葉が滝壺へ落ちるのを眺めるやうな、痛い佗しさをかみしめてゐた。

彼れは、停車場で、綿屋に別れて、そのまゝ、帰京したのである。原敬が暗殺されたのはそれから間もないことである。外遊から帰つてからも、寂しいうちにも立派な楓の成長した姿を思ひうかべるのだが、面会除けでない、ほんとうの意味で「身辺多忙」で、未だに、東山への再遊をさへ実行せずにあるのである。

殊によつたら、彼女は、あのグロテスクな哀はれな青年の妹（遺稿の詩によつて、彼れの一人の妹が幼ない時に芸者に売られてゐることが分つた。）ではないかとさへ思ふ時がある。

(をはり)

注

- (1) 他の原稿では、普通、題名のあとに句点(。)が打たれている。
- (2) 客車や機関車に、特別の工夫をして曲線通過を容易にし、動揺脱線の防止を計つた鉄道車輛。ここでは単に「客車」の意味に用いられている。
- (3) 「召聘」の誤記。
- (4) 幸徳秋水(明4—44/一八七二—一九一一)を指す。ここで話題にな

- っているのは、その著書『基督抹殺論』。
- (5) 「累(るい)」を入れようとしたものか。
- (6) 安田善次郎(天保9—大10/一八三八—一九二二)のこと。大磯の別邸で、大正十年九月二十八日、国粹主義者朝日平吾によって刺殺された。
- (7) 大正十年(一九二二)十一月十二日、米大統領ハーディングの提案で行なわれた五ヶ国(英・米・仏・伊・日)会議。俗にいう「ワシントン軍縮会議」。
- (8) 大正八年(一九一九)一月十八日に始まるパリ講和会議を指す。六月二十八日、ヴェルサイユ条約調印。
- (9) 小林豊との新婚時代、嫉妬から、短剣で妻に迫ったという話が思い出される。
- (10) 万延元年(一八六〇)。
- (11) 正しくは「軍艦奉行。」ただし、咸臨丸艦長として渡米(万延元年)の時はまだ軍艦操練所教師方頭取であった。
- (12) この稿の欄外に、わざわざ「里程、尺度を米法に表はすべし。」との注記を行なっている。彼の内なる列国への意識、国際意識を、こうした所にも見ることが出来る。
- (13) もちろん「磐梯山(ばんだいさん)」の誤記。
- (14) 第一次世界大戦中、イギリスに起こった社会主義の一立場。サンディカリスムと国家社会主義との混淆に成る改良主義である。
- (15) ここは「憂鬱」の意か。
- (16) ここは「大津絵節」の意。
- (17) 「釈迦」については、彼自身大正十二年(一九二三)、出版する予定で組版紙型の工程まで作業は進められていたという。しかし、同年四月の舟木芳江事件のあおりで、中断の止むなきに至ったとされる。
- (18) 大正十年(一九二二)十一月四日、東京駅頭で、中岡良一のために刺殺された。
- (19) 彼自身の帰国は、大正十一年(一九二二)十二月。

変な弁護士。(小説)

嶋田清次郎。

一、

その頃、彼れは生れつきの人懐っこい性質にもよったが、何といふわけもなく、たゞ佻びしい、去る人のあとを追ふやうな、やるせない心の影を感じてゐた。その年の正月から「いったい何時出発つのだらう」と噂されてゐた彼れの外遊は、彼れ自身もいったい何時出発するのだらうとか自分の無力をかへりみるほど、はかどらなかつた。しかし、その送迎と躊躇は彼れの無力とのみは云へなかつた。彼れがこの四五年の間支持してきたそのまゝ、残してゆく日本の新しい時代を、彼れの最初の精神の下に、彼れの暫らくの留守を守るに適當な後継者がなかつたのである。「これといふ後継者がなければならぬ、仕方がない。自分は三年の予定のものは一年に短縮してでも、大洋の彼方から、この島国日本を支持し見守ることが出来る。」

それは大正十年の晩秋十一月のことだった。外遊準備の一年余の鵜沼の海岸住居を引き上げて、ある下宿に同郷後輩の名儀で宿をとって落付かない日をおくつてゐた。

彼れの考へでは、少くとも、彼れの帰朝の時期は、実質的にはもちろんこの××的にも社会的にも、また政治的機制の上からみても、彼れが主として滞在する英吉利よりは一世紀はおくれてゐると思はれる我国にも、少くとも普通選挙法が実施せられる時期であらねば

ならなかった。彼れは××××××××××その彼れの告別は、赤坂の「錦水」あたりでゆっくり徹宵汲みかほしたいと考へ、新時代の政治家としての彼れの、民衆選良諸君への告別は、その頃、未だ焼けなかった時分には、政治的集會に用いられた神田の基督教青年會館で、告別演説會をひらく考へで、その原稿の「理想實現の努力としての政治」も、すでに鴫沼時代に完成してをったものである。錦水の會では、ほんとうに芸術家としての彼れを認めてくれる政治界、宗教界、教育界、思想界、文芸界にわたる同僚先輩を招待し、演説會では、彼れの少年時代から彼れの身辺にゐてくれた青年学徒とともに壇上に立ちたいと願へ、その事實もすでに決定してゐた。

小 林 輝 冶
——その二三日、外務省情報部にゐる知人や、朝日新聞社にゐる先輩をたづねて、その厳かめしい Beauocracy⁽³⁾ の空気が、輪転機の響きや印刷墨の匂ひに圧倒された彼れは、心合ふた友人の東田とその一日目を慰めようと、京橋の東田の実家へ電話で在否をたづねた。

「どなた様です。は、野島さんですか、東田はうちにあるやうでしたが、暫くお待ち下さいまし。」暫くして、東田の姉の聲がこたへた。「どうぞ、お出下さいまし。お待ち申します。」

二、

中橋広小路で下りて、十一月午下がりの、薄い秋の日の冷めたくかげった、こみいった下町を、伊勢崎単衣上下にセルの袴をはいて、自慢の紫檀に象眼七宝をちりばめた純金環をはめたステッキを腕に

下げて、歩いた。町角のタイプライター卸店のショウキンドウのなかで働らいてゐる女事務員をみて、彼れが帰朝してから、設置すべき事務所の規模と景色を想像してみた。

東田の実家は、表具店や骨^{ほね}店にはさまれた、その界限で信用のある精白米屋で、父は東京市會議員に一つの議席をもつてゐるといふことだった。

「東田君はゐますか。」彼れは店前で、棒編の突軸をきて、電気器機に玄米をかけて、精白している、東田の姉^{むすめ}に声をかけて会釈した。「あ、野島さんですか。」白く塗れた手に^おを下げて姉^{むすめ}は街路の方をみた。「ゐるやうです。」母を異にしてゐるといふ東田は、新築の下町らしい主家と溝板をかぶせた細い小路を隔てたとなりの仕もたやの古びた一室をかりて、起居してゐた。「継母がゐらないだよ。」姉^{むすめ}の少し寛ろいだ口調から気づいて、彼れは踏み破りさうになる離れた溝板をへふん^{ふん}踏まへた。(どうかすると継母は東田の胸襟をつかまへて、武者振りついて怒るといふことだった。)

「よう、」背の低い、にきびのあとのひどい、色の黒い、東田が、人のいゝ笑みをうかべてあらはれた。「どうしたのだ。」「どうってこともないよ。この頃は旅券下付願やら、外務省だの、新聞社だの、急がしくてたまつたものぢやない。——今日は、君と一緒に久しぶりでどこかへ出かけるつもりでやってきた。」と、他家の台所口から、虫くつた古い階段をのぼった。

東田は藤椅子を彼れにすゝめて、古ぼけた都会の屋根や、女の汚れた下着などの乾してある裏手のみえる窓の障子をあげた。壁際には、彼れがその時分勉強してゐた法律書類がうづ高く積みまわつてあつ

「ハッハ、のん気なことを言ってる。」東田は別の世界のことのやうに、また不可能のことを言はれたやうな一味の暗らい哀愁を含んでうそぶいて、乾いたペーぶめんとを歩いた。街路樹に、十一月の秋風が砂塵を吹きつけてゐた。

「活動っておかしなものへ、案内する気になったものだね。ハッハ」東田は思ひかへすやうにわらひだした。「中隈といっしよに、帝劇へいったんだ。中幕で、小三郎といったっけな。明烏とか何んとかいふのをうたつたっけ。この世にはあんない肉声もあるのか、と感心してゐたよ。」

瞬間的だったが、変な奴もゐるものだ、切角自分が案内しようとするのに、他人といっしよにいった話ばかりしてゐる、と妙にはなれた気持になったが、彼れは、思ひ直して人出の少くない、白い都會の街路を歩いた。濠端の青黒い水面へ、柳の枯れ葉が落ちてゐた。

治 輝 林 小

三、

Machiney⁽⁸⁾の写眞は仏蘭西革命を取りあつたものだといふので、彼れは特に二三日前、外務省からの帰途切符を買ってをいたものだった。

「何んだ一等なのか。」

「うむ、外務省へ出てゐる友人にもらつたのだ。」と、彼れは東田のどうかすると、懐の中をのぞきこみさうになる一種の庄はしさをさけて、さっさと、帝劇正面の階段をのぼつた。

昼興行のせい、劇場の内部はひっそりと秋の薄日が深い静かさ

にさしてゐた。観衆もそんなに多くはなかった。彼れは莨をくゆらして、そのソファにもたれて、哀愁を含んだ静寂な都會の秋を楽しんでゐた。

写眞は彼れの好きな、亜米利加のリリアン・ギッシュとドロシイ・ギッシュの主演だったので、もとよりわるくはなかった。ヴェルサイユ宮殿のルイ十四世の饗宴や、可憐な貴族の娘や、ふらんす革命の勃発や、ダントンがむかし生命を助けてもらった少女が死刑にならうとする切那、革命裁判所へ駆けつけて、「この少女は自分が貧窮の時に、自分を助けてくれた少女である」と説きふせて、助け出すシーンは、ことに観衆には興味深いものと受とられてゐるらしいかた。

「だめだ。やっぱりアメリカの粗製写眞の一つだ。ダントンが皮膚病で、風呂をつかつてゐる時に、反対派のスパイ女に刺し殺された史実さへ知らぬ奴の作つたものだ。」

今度は彼れが、怒り出して、しきりに懸命に写眞に見入つてゐる東田をうながして外へ出ようとした。一つには群集のいきれにたえきれなくなつたせいもあつたが。

「これは終りまでみてゆくよ。」

「それぢや、中央亭の食堂のヴェランダにゐるから。」と彼れは一人、その場をぬけ出して、窓のあけはなつた、誰れもゐない、広い食堂の、濠端に面した卓子についた。純白のテーブル・クロスがかけてあるだけで、未だ食卓の花は生けかえられてなかつた。ぶえらんだからは、宮城の青さびた薔、松林、石垣、腐つて動かぬ濠の水面、電車通りが、黄色い陽光に漂ふてゐた。秋風がそよそよとふいた。彼れはひとり

で、ウキスキーを命じた。少しさびしくなったが、ひとりで、その頃やうやく味の分りかけた洋酒の盃をかさねた。

「どうしたのだ。何故終りまでみないのだ。」と、まもなく、東田は、やってきて、彼れのすゝめる椅子についた。

「何んだウキスキーをのんでゐるのか。——生意気ぢやないか。君なんか、^{マア}豪傑がってゐるんだからな。ハッハ。」

さう言ひ乍ら、東田は、彼れのすゝめるウキスキーをかたむけた。

「ハッハ、演説をする時の奴の顔つたらないね。凄い顔だね。」

「日本のものよりかいゝにきまってるら。」彼れはふと、自分が、その憧憬の大洋の彼方の美しい人種のため中へ遊びにゆけるのだと思ふと、単純なうれしさを感ぜずにゐられなかつた。

「実は、この正月の十日に、僕の外遊告別の演説会をひらくことになつてゐるんだ。中隈は、小橋から、ドストエフスキーの神××××記憶について、といふ題までおかつて承知してきた。君もぜひ一つ出てくれませんか。」と、彼れは言葉を改めて、丁寧に、礼儀正しく頼んだ。

「ハッハ」はじめは東田は信じられないらしかつたが、彼れが真面目なので「それなら出よう、題は何んとうしようか。」と考へこんでゐたが、「死刑の存否を論ず」としよう。」と言つた。

彼れは浅草まで牛肉を食べにゆくことにして戸外へ出た。すでに、夕靄が、その東京の中心の上層をたちこめてゐた。——彼れはその夜、万世橋楼上の「ミカド」ではゆる Protetariat 作家の一人である の処女作出版の会に招かれてゐたのを忘れてゐた。

四、

牛鍋で夕飯を終えて、充分に酔つぱらつた東田と彼れとは、もう話題に尽きてゐた。東田は、中隈が未だ東京高商で福田博士指導の下でラスキンを研究してゐた時分、よく浅草のキネマ倶楽部へ出かけたことを話した。「中隈はどこか女性的な処があるんだ。Sponge のやうに何んでも吸ひとれる丈け吸ひとるのではないかと思ふのだ。」そしてつけたした。「己れはどっちだらう。」

「君は男だよ。男といふものは、あまり他にわづらはされないで、他人と自分を比較しないものださうだ。」

「君はどっちだらう。」東田がたずねた。

「己れか、——」と考へかけたが、彼れはさういふ意味で自分がどっちであるかは分らなかつた。「——君は幾つだったかな。」

「己れか、己れはもう三十過ぎてしまつたよ。」と東田は妙に寂しい顔をした。

「君はいつまで独身でゐるんだ。」と言ひかけたが、ある記憶がそれを言はせなかつた。その夏未だ、彼れが鶴沼にゐた時分、その頃、勤めてゐた小学校を退職して問もない東田は、弁護士受検だといつて、同じ法律書生と暫らく自炊生活をしてゐて、彼れを訪ねてくれたことがあつた。

彼れは、くるめくやうな鬻れた青空の下を、初夏のさわやかな微風、松林の細道を片瀬へ近い鉄鉱泉へ東田を伴つたことがあつた。小男の東田の肉身の、精力の涸渇してゐるやうなのみて、彼れは「文学や法律を頭脳の固まらないうちからいじくつてゐるものは、

どうも早熟で、大切な精力を無駄使ひしてしもふ傾向があるやうだ。純潔な青年が、娼婦にその肉体を吸収アブソイルされてしまうやうに。」

「それはさうだ。」と一応はうなづいたが東田は、人の善い顔に一抹の生気を蘇らして、「だが、さうでもないよ。」と東田に一人の Groious ¹⁰な少女のゐることを語った。彼れは、かへってから日記の二頁をひらきみせて、彼れの秘密を裏証したものである。

「君のあの、輝やかな少女、はいったいどうしたの。」

「いけない。」東田は手を振って拒否するやうに、顔をあからめた。

「あの娘は嫁にいつてしまったよ。嫁にいつてしまったよ。」

彼れは、東田ときすをしたり、「抱擁いだだ」かれたりした下町豪商の江戸娘が平然と嫁にいつてしまった世界の不思議さと思った。

「女てやつはずるい奴だ。これが万年筆をあい、つの卸店なせに買ひにゆくと、ひどくすましやがって、それでも上等の万年筆を普通の値で黙って売ってくれたつけ。——どうも女てやつは、秘密だけは、そおと胸のどこかにしまつてをいて、生活は生活で平然とすまきつてゐるものらしいね。あんなにすましてゐて、あれ丈けの（と、東田は、東田の薄暗らい二階の部屋に於ける女の嬌態を追ふものやうだった。）ことをやつて、ましてまた平気であるのだからおかしなものだ。とにかく、づるい Creature には相異ないと思ふね。——女てやつは恋愛と性欲と生活——結婚とを別々に考へてゐるのではないかと思ふのだ。」

東田の瞳が少し異様にきらきら輝やいてきた。

「文房具問屋の娘なんだ。すばらしい江戸娘なんだ。先方の貰ひ手は慶応の理財科を出てアメリカがへりの Master of Science だとい

ふことだった。——結婚する前の日にも、己れの部屋を訪ねてゆきやがった。」

五、

直ぐかへる筈でその牛肉屋を出たのだが、牛肉屋のとなりの、不思議な異様な、ジプシーの感覚をもつて迫る青い瓦斯カンテラの光の下で、騒々しい楽隊、むうっとせまる馬の動物臭、毒々しい肉襦袢をきた肉塊のやうな若い女の危険な芸当、円輪の火焰をくぐる裸か馬、馬上に立つて腕ぐむ、背の低い臀部のもれあがったジプシー娘、——曲馬団の曲芸をみてへ、V みるうちに、また気分がすっかりかわつてしまった。歓樂にあえぎきつた民衆の上に、蒼い秋の夜空に、星の群れが輝やいてゐる。

彼れは「ミカド」の「処女作の会」へ招待されてゐることを思ひ出した。

「——君の、空を射して語る、の出版祝賀会に招かれてゐるのだ。」

彼れは万世橋で電車を降りて、須田までの路を歩きながら、東田に語つた。何故か東田を手離したくない気持でいっばいになってゐたのである。

「誰れさんの会合でいらっしやいますか。」

「——君の会合だ。」彼れは階上の杉の植木の浅い香に息づいて、Smoking-Room へはいつた。余ほどに手間どつてゐたやうだったが、七時を過ぎたばかりだった。

「野島君でないか。」背広をきた、肩幅の広ろい、当夜の会合の主催者の一人の飯坂が、大きな口辺に深いしわをよせて話しかけた。飯坂に会ふとは彼れは、思ひがけなかつた。

「久しぶりです。お嬢さんは御達者ですか。」

「うむ、栄子は達者である。」飯坂は何故か処女のやうにはにかんで蔑をくゆらすのみだつた。

その夜は三四十人の極く内輪な会合だつた。感覚と修辭のデリカシイをもつてきこえた文学者のM・S氏をはじめ、どちらかといへば詩人や歌人の大家が多く出席してゐた。彼等は心から、この日本に生れたマキシム・ゴルキイの前途を祝福した。彼れもはじめて知る人ではあつたが、飯坂の次に立つて簡単に次のやうに述べた。

「今日は、思ひがけず君の会合にめぐりあはせて、同君を知ることの出来たのを大へんうれしく思ひます。今も、浅草へ散歩に行きまして、まことに不思議な、曲馬団の娘達の曲芸をみてきました。年頃の娘が、裸形となつて、鞍もをかない馬の背に立つて、石油に火のついた燧の円環をくぐつたり、六七米もあらうと思はれる屋台の天井からつりさげられた虚空のぶらんこに乗つて、——巴里のオリムピアあたりではもっと激しいきわどい芸当が日となく夜となく行はれてゐるさうですが。——大波動を蒼い瓦斯カンテラの光のみなぐる空間に描いて、次のぶらんこへ飛びうつるのです。下の地上では、網をもつて万一の危険を用意してゐます。さつとした、殺氣を含んだ一瞬間、裸形ジプシーの娘が、次のぶらんこの足場へ逆さになつてつかみつく。——自分は、その危なっかしい芸当をみてゐて、一向に平気で、顔面筋一つゆがめぬ娘を不思議な氣持でみてをり

ました。すると、まるで似ても似つかぬ別の話ですが、自分が信州長野市へある夏講演にいった時のある驚異すべき一つの発見を思ひ出したのです。その夜、市街の料亭でひらかれた慰勞の宴をこつて、自分は、ひとり俵をある色街の待合へはせたのです。最初喚んだ妓は、大分年もとつて、木曾節などをうたつてきかせてゐましたが、その妓がかへつて、次にきてくれた妓は、未だ座敷着をきないで、あらい木綿緋の単衣に、子供らしいめりんすの帯をしめて、髪をお下げにしてゐるのです。自分をはじめはその待合の娘かと思つてゐましたが、さうではなかつたのです。——自分がいかに一種の飽きることはないこの世の探求者であるかを自白するやうですが、その夜その娘々した妓は、穴蔵のやうな秘密の部屋で、そのめりんすの帯で膝をしばつて、蒼ざめて、死んでしまひます、といふのでした。それは一つの媚びであつたかもしれませぬ。しかし、自分には、真実にその娘が屈辱のために死ぬやうに思はれました。——彼れははつと息づいて、一口のビールで渴をうるほした。「同じやうに、自分のからだを焦つて、からだを生かしてゆくまづ職業といはねばなりません。しかし、今、しやべつてゐるうちに考へたことですが、よくよく考へてみると、前者の曲馬団の娘は裸形とはいへ、肉色のしやつをきてゐるのです。まして裸か馬を駆使してゐるのです。後者の娘は、めりんすの帯で膝をしばらなければ、その節操と屈辱の感とから、自分を防ぐことができないのです。この二つの事件を並べることは恐ろしい、人の魂への徳のやうでもありません。しかし、どうしてもからだをうって生きてゆかねばならない時には、私共はどっちの道をえらぶことせう。どっちの道をえらぶ

のが正当なものでせう。自分は□君の前途ある文学的生活の門途に際会しまして、この二つの事件をみた事実を提供するに止めます。」そして、彼れは、彼れ以外にもう誰れもが言ふ可きことを言ひつくしたやうに見えたので、盃をあげて、一同の乾杯をうながしたのであった。

——別室では、すでに初冬をかざる温室育ちの西洋草花の目ざめるやうな紅、白、黄色のえぞ菊の花の間に、ストーブをかこんで東田が彼れの歌道の師である歌人や「太陽の子」の著者の詩人やなど、いっしょに、紅いポット・ワインの盃をあげてゐた。飯坂が、よく「文学上の伴侶としては善き人であらう」と指摘してゐた藤江に、杉の植木の香の健々しい廊下で正月十日の講演会に彼れが主要な仕事である欧米演劇の発達について出演の許諾を得た彼れは、その別室の別の卓上で、盃をあげて相互の健康を祝さずにゐられなかつた。藤江は、祝宴のあと始末がいそがしいか、そのまゝ、食堂の方へ去ってしまった。

「今のは誰れだい。」と東田がたづねた。

「今のは藤井真漢君だ。」と彼れはこたへた。その藤江の黒い瞳の光りは、かつてある無政府主義者の肖像を描いた洋画家の瞳に似てゐた。「正月の講演会に出てくれることになったのだ。」「へんな奴を入れるのだな。」東田は、酒によつていさゝか得意になつた上調子さでしゃべりはじめた。

「野島さん、何年ほどあちらへ御滞在の予定です。」

「ほんの一年ほどです。」

「それは短いですね。四五年ゆっくり留学された方がよくはない

でせうか。」

「太陽の子」の著者が、大人しやかに、人なつこし気に微笑して語つた。彼れは十年ほど前、「青年、青年、火の信仰、淨い熱。」とその詩人の一節を愛誦したことがあつた。

「ハッハ、四五年も、君が外国へいってをれるものか。」と帰途で東田は言つた。

正月十日、大隈重信侯の逝去された日、彼れはたゞ一人で、「熱狂した群集」に「理想実現の努力としての政治」に就いて語つた。東田も中隈も藤江も途中で断つてきて、彼等の演説はきくことができなかつた。

六、

東田については、それから一年あまり会ふ機会がなかつた。

彼れが予定通り一年余で帰朝して代々木に仮宅を構えてゐた時分、三月下旬のある日ぐれ方、東田が訪ねてきた。彼れは彼れの洋館応接間にとほつて、深い静寂のうちに、彼れの「全国民への報告書」である一論究の筆を執つてゐる彼れの背を押えて「どうしてゐるのかと思つた。いやに治つてゐるぢやないか。」と、一年前と少しも変らぬ口調で「野次」を語つた。東田は未だ独身でゐるらしく、何んとなく古びてさびしげだつた。

「弁護士になつたさうぢやないか。この間、新聞の広告面に、何か民衆相手の相談所のやうな Office をかまへるといふことだつたが

——」と、彼れは執筆中の論考を押しやつて、卓上の早咲きの□

の花束を見せた。

「どうしたのだ、たいさう綺麗な花ぢやないか。」と東田は、白い紙包みを解いて、机の上の硝子瓶に生けるのだった。「誰れに貰ったのだい。しゃれていやがら。」

「なあに。」と彼は言はなかつた。そして伊太利土産の明るい南欧のソプラノを蓄音器にかけてきかせた。夜が来て、食事時になつて、彼れは東田をつれて、ゆきつけの赤坂へ出かけた。

「支那料理を御馳走しよう。」彼れは御××料理の支那料理へ東田をつれてあがつた。「紐育やシカゴでは西洋人の方が、好んで支那料理を食べるのだ。支那料理は、実に地球の三分の一を征服している。」未だ早春の浅さいさわやかな宵であつた。山王の黒づんだ森から、春の風が、吹いた。

「支那料理には、ビールが、口腔内の脂気をとって、いゝものだよ。」弁護士試験に及第はしたものの、現在身のふり方に困つてゐるらしい東田は、ビールに酔つて彼れに、「身の振り方」を相談した。

「どこか、風景のいゝ田舎の都市の裁判所の判検事になるのもいゝと思ふ。弁護士ではどうか。名前を知られたり、その土地なり階級なりの人々に信用を得るまでが、なかなかのことだらう。」

彼れはふと、すでに中年の東田を淋びしい影の薄いものとして考へぬわけにゆかなかつた。

「どこか田舎の都市へ検事にでもなつてゆこうか。——その時は、野島君、君を招待するよ。職権をもって、君に、都市一番の舞妓のおとりもちをするよ。ハッハ」

「何を言つてゐる。」と、彼れは苦笑して、女中に、東田にもつ

と注ぐやうに命じた。

やがて、ひどく酔つた東田は、二三日前に湘南の海辺に白秋、夕暮等詩人の徒をたづねて飲みあかした愉快さを話して、立上つて新しい木曾節を浴い中年の声で歌つて踊り出した。

「ニジンスキイのロシヤ舞踊のやうぢやないか。」と、彼れは、妙な狐のやうな手付きで、幽霊のやうに踊る東田を、不思議なものとして眺めてゐた。

東田はまた、よくひとりで浅草へ安来節や鴨緑江節といふものを、ききにゆくといふので、錆びのあるいゝ声でその流行の小唄をうたつて、踊つてみせた。

朝鮮で一番高いは白頭山、嶺の白雪融けりやとて融けはせぬぞ
えわしが胸

松江大橋流りよが焼けよが、わだみ通ひは舟でする
それは芸妓や、色を売る女の踊るのとは異つて、浴い、さっぱりした嫌味のない、高原の秋の薄や萩を想はすむしろ一種高雅なユーモアをふくんだ、友情の表現といつてよかつた。

彼れは大正十年の暮れのある夕方、街路樹の葉の落ちつくした寂びしい銀座のペーぶめんとを東田とふたりで歩いてゐた時の一事件を思ひ合せてみた。ふと、東田は夜店の植木やの屋台の前で立止つて、仕立おろしの薩摩餅をきた、慶応普通部の制帽をかぶつた背の高い青年に、「お前、今から家へかへるのか。」とたづねた。

青年のうしろには、シヨールであごをかくした、耳隠しの女学生らしい少女がひつたりとより添ふてゐた。東田は彼れを紹介して、「野島さんだよ。」と言つた。

「野島さんですか。」とその清潔な青年は丁寧な帽子をとってお辞儀した。少女も黙って青年にならった。「あ、野島です。」と彼れもかるく頭のソフトに手をかけて会釈した。

青年と少女が去ったあとで、東田は、「弟です。仕様がなないので勝手にあゝいふ女学生とくっつきやがって家でも仕方がないので一軒家をもたせたんだが、どんなことをして生活しているのか。」

「東田、いゝ妓をお世話しようか。」と誘ったが、東田はわりにつましく首をふって、別れた。

——彼れが、その日、西洋室で見た花束の捧げ主である純潔なる華族の令嬢と、湘南の海辺へ、「新婚の旅」に出かけた時、彼れはあやまって、東田の名を宿帳につけた。それが、あの一時天下を聳動させた「彼れの恋愛事件」へのつけ火となったのである。震災後、東田はある東北の「震災のない」都市の新聞記者になっていて、彼れを市民講座の講演に招請してきたが、彼が、その東北第一の都市へいった時は、東田は顔もみせなかった。それ以来、彼れは、東田を、たゞ「変な弁護士」と呼ぶことにしてゐる。何故なら、東田は、赤阪の支那料理で、踊ったり歌ったりしてみせたあとで、彼れが、牢獄へはいることを予感するやうに、「君がもし何かの問題で牢へはいるやうな場合には、己れは、野島君はまだ書かねばならん Fate があるから、といて保釈願ひを出さう。」と言ひ、飯坂が、時々新聞の社会面を何かの小さな事件でにぎはすのを指摘して、「飯坂のやうに自分の名前の忘れられるのをふせぐためだけに、何か軽微なことを×ひおこすのは止める。何かするなら黙って生涯牢獄にゐる朽ちてゆくやうな大事件を、一生に一つ実行したならそれでい

ゝと思ふよ。」など、言つたからである。彼れは、その後、書店の店頭で、東田が、小さな同人雑誌へ監獄見物をした短歌を寄稿してゐるのをひらきよみしたと覚えてゐる。それには何んでも、東田が、監獄へ投ぜられるやうな時には、独房をえらぼう、と、わりいさぎよい、胸懐を述べてゐた「江戸っ子らしい」ものであったと覚えている。

彼れは東田に中限のやうにゆきとゞきたい、女房の「あたる」日を折つてゐる。

(をばり)

注

- (1) 大正十年(一九二一)一月、清次郎は「鶴沼」へ転居。そのことを踏まえ、ここは書かれている。翌十一年四月洋行、同十二月帰国。
- (2) 事実、彼の帰朝してまもない大正十二年(一九二三)一月には「普選即行全国記者同盟大会」、翌二月には「普選即行大示威行進」が東京で行なわれている。しかし、その「普選選挙法案」は、同年三月、衆議院において否決。選挙人資格に著しい制約を加え、二年後の大正十四年三月、初めて国会を通過した。
- (3) Bureaucracy (官僚主義) の誤記か。
- (4) (5) Lillian Gish (1896-1965) ・ Dorothy Gish (1898-1968) ——共に、アメリカの女優として著名な俳優である。
- (6) いうまでもなく戯曲「項羽と劉邦」(大五十一)は長与善郎の出世作。武者小路実篤との仲は、明治四十四年一月に始まる。
- (7) 「晝鳥敏」を指したものであろう。
- (8) 不詳。

- (9) 「厭はしさ」を誤ったものか、それとも「厭」に「厭」の意味を通わせたものか。
- (10) Danton (1759-94)。最後は、ロベス・ピエール派と対立、処刑される。
- (11) 「剎那」の誤記。
- (12) 彼自身既に、吉野作造の「黎明会」、新明正道らの「東大新人会」との交流をもっていた。大杉栄らの「社会主義同盟」(大9-10)にも加盟。そうした背景もあって招かれたものであろう。彼の外遊前年に始まる「種蒔く人」(大10-12)のメンバーの誰かのものであろうか。なお、Proletariat は Proletariat の誤記。
- (13) 福田徳三(明7-昭5/一八七四-一九三〇)法博を指したものであろう。大正七年、彼は吉野作造らと「黎明会」を組織、「解放」の編集にも関係、当時の民本主義運動における中心的指導者の一人であった。
- (14) Glorious の誤記。
- (15) Science の誤記。
- (16) やはり「門出」とするのが普通であろう。
- (17) 福士幸次郎(明22-昭21/一八八九-一九四六)を指したのか。「太陽の子」は大正三年に出版された彼の処女詩集である。
- (18) 大正十一年(一九二二)一月十日、大隈重信没。
- (19) 大正十二年(一九二三)三月、帰朝第一作として「地上」第五部に当たる「我れ世に勝てり」を出版。つづいて、外遊報告「世界の現状及将来」を出す予定であったことは、この年の賀状によっても明らかである。「本年は『地上』第五部(長編小説)『世界の現状及将来』(外遊報告)の二著公刊のほか、社会的公人として、いさゝか従来の境地より一步をすすめ得るかと思存じてゐます」
- (20) 和田見。なお「鴨緑江節」は大正七・八年頃、「安来節」は大正六・七年から昭和の初期にかけ広くうたわれたものである。「流行歌百年史」

(藤沢衛彦/昭26・10) 参照。

(21) 大正十二年(一九二三)四月に起きた「舟木芳江事件」を指す。この時、舟木芳江と逗子「養神亭」に宿泊した彼は、宿帳に「東京市京橋区大鋸町十一番地平民弁護士矢代亀広(三十一才) 同妻貞子(二十一才)(傍点筆者)」と記している。

(22) 「招聘」の誤記。

(23) このくだりは「変な弁護士」が、のちに「牢獄へはいること」になった彼によって、つまり西巢鴨の「保養院」(鉄格子のはまったその病院は、彼にとって「牢獄」以外の何物でもなかったはずだ)で、書かれたことを暗示している。